

9 社会的行動障害のある患者の看護

病院看護部 3階病棟 堀岡美由紀 野田みゆき 藤枝徳子

1. はじめに

高次脳機能障害には、記憶障害・注意障害・遂行機能障害・社会的行動障害などがある。今回、高次脳機能障害による社会的行動障害があるA氏の事例に出会った。A氏は要求が通らないと興奮して大声を出し、要求を押し通そうとする行動があった。看護介入により、徐々に社会的行動障害(主に始終大声を出す)は減少し、周囲と適応した行動がとれるようになった。その症例を通して、社会的行動障害に対する看護について報告する。

2. 研究方法

①事例研究 ②研究期間：平成18年6月下旬～12月上旬

③事例紹介：A氏 40歳代 男性 診断名：脳出血 障害名：右片麻痺・失語症(全失語・SLTA (標準失語症検査) 検査不可)

④倫理的配慮：病院の規定に沿った手続きを行い、研究対象者と家族へ説明し、自由意思で諾否が決められるように配慮し、承諾を得た。

3. 結果・考察

表1 表2 表3 参照

《環境の変化による混乱の時期》A氏は、入院という環境の変化により、スタッフに自分の欲求を伝える手段が解からず混乱し、大声を出していたと考える。トイレの前で大声を出すA氏に対し、尿意・便意の有無を確認し、靴を履かせてからトイレ介助を行うことを繰り返したことで、靴を持ってくる行動が排泄の欲求の表出方法となった。A氏の感情や欲求を理解するために、行動や周囲の状況から看護師が推測し対応をして、A氏の反応を確認することを繰り返し行った。これにより、A氏も排泄などの欲求の表現方法を確立でき、大声を出すことや興奮することが少なくなったと考える。

《他者との関係において問題が発生した時期》A氏は欲求コントロール低下のため自己の欲求を優先し、共用テレビを独占するといった社会的行動障害がみられたと考えられる。食事中にテレビをつけるという行動を起こしたその場で、「静かに待つように」と説明したり、テレビの前から離れてもらうよう誘導したりを繰り返し行ったことで、行動修正ができたと考える。また、A氏の行動に対し謝罪と説明を行い、他者との関係に介入し、調整したことが、共用テレビを使う際に周囲の状況を伺う行動に至ったと考える。

《要求が増大した時期》妻は社会的行動障害に対して十分な理解ができていなかったために、大声を出したときに甘い物をあげることを続けていた。過剰になった要求に対処できなくなった妻に対し、行動修正の必要性や方法を説明したことで、妻の理解が得られ、看護師と統一した関わりができるようになった。A氏の周囲の人々が統一して関わることで、有効な環境調整と行動修正ができたと考える。また、行動修正を行っていく過程で、看護者側からの一方的な変化を求めるのではなく、A氏の反応をみながら、受け入れ易い環境をつくり出した。A氏とコミュニケーションを図りながら、環境調整を行ったことが行動修正に有効であったと考える。

表1 《環境の変化による混乱の時期》6月下旬～7月下旬

患者の言動	アセスメント	看護の実際と結果
<p>終日裸足で車椅子を駆動し、病棟内を周回していた。靴を履かせても脱いで、自室に自ら置いていた。</p> <p>トイレの前で大声を出していた。</p>	<p>何故靴を履こうとしないかは分からない。</p> <p>トイレは排泄の場所であることと、トイレの場所の理解はできている。</p> <p>伝える手段が分からず、大声を出して尿意・便意を伝えようとしている。大声を出さずに、尿意・便意を看護師に伝える方法を確立していく必要がある。</p>	<p>トイレ付近で大声を出しているときは、尿意・便意の有無を確認し、靴を履かせてから、トイレ介助を行った。大声を出さずに、自ら靴を看護師に見せることで尿意・便意を知らせることができるようになった。</p>

表2 《他者との関係において問題が発生した時期》8月上旬～9月下旬

患者の言動	アセスメント	看護の実際と結果
<p>自分の食事が終わると、食事中の患者がいても食堂のテレビをつけていた。（食事中は食堂のテレビを消すことが病棟の規則となっている）</p>	<p>食事に集中するためにテレビは消しているが、他の患者の状況が理解できない。病前の習慣もあるかは不明だが自己の欲求を優先してしまう。</p>	<p>他の患者の状況とテレビを消す必要性を説明、その都度テレビを消すことで、食事中にテレビをつけることはなくなった。</p>
<p>自分の食事が終わると、食事中の患者の近くに行き、大声を出したり舌打ちをしていた。</p>	<p>テレビを消す必要性は理解できた。</p> <p>しかし、テレビを見たいという欲求があり、食事中の患者がいなくなればテレビを見ることができている。</p>	<p>自室で待つように説明し、止めない場合は、テレビの前から離れてもらった。食事中の患者への大声や舌打ちはなくなり静かに待つことができるようになった。</p>
<p>他の患者が観ていてもチャンネルを変えた</p>	<p>自己の欲求を優先してしまう。他者との関係を築こうとしない。</p>	<p>周囲の状況を説明、A氏の行動に対して他の患者へ謝罪と説明を行うことで周囲の状況を伺う行動がみられるようになった。</p>

表3 《要求が増大した時期》10月上旬～12月上旬

患者の言動	アセスメント	看護の実際と結果
<p>妻の面会時、病棟外で飲食をしたり、売店で陳列してあるアンパンを取って開封した。</p>	<p>社会的行動障害への妻の理解が不十分であった。妻がA氏の要求どおりに対応し続けたために要求が増大していった。</p>	<p>環境調整（間食の約束事・妻の面会の調整・間食の保管管理）と対応を統一することで、大声を出して要求することが少なくなった。</p>